



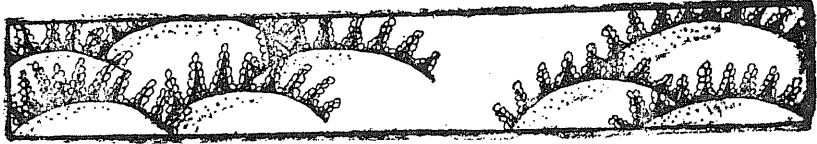
# 智慧くらべ

金子彦二郎

それは明麗といふ言葉がほんたうにふさはしい小春日のある日曜日の前でした。

一  
瑠璃子さんは仲善しの紀伊子さんを誘つて、大好きな春田先生のお宅を尋ねました。明麗な空気を透して輝かしい太陽の光が部屋一ぱいに差し込む南向きの小座敷で、面白いお話を伺つたり、オルガンに合せて歌劇の軽やかな歌の一節を興じたりしてこの小半日は世界中の時計といふ時計が同盟罷業でもしてゐるかと思はれるほど、時間といふものゝ駆歩から遠ざかつてゐました。

二  
春田先生は何時の間にか瑠璃子さんたちの爲に、二人の大好きなお鮎をとゝのへて下さいました。楽しい晝餉が、若い、優しい女の先生とかはいらしい二人の女生徒とでとりしたゝめられました。つねぐから好物なお鮎が、この時はまた特別においしくて、舌の上で溶けていくやうにさへ思はれました。



おひるがすんでから、今度はランプが取出されました。先生がいつもお負けになるので、勝負がつく毎に二人はかはいらしい口からどつと歓聲をあげるのです。それにもだん／＼飽きて来たので、こんどは謎のかけつこを始めました。

「年をとるほど髪の毛の黒くなるものなアーに？」

と紀伊子さんがまつさきに題を出しました。

暫く小頭を傾けてゐた瑠璃子さんが、急に瞳をかゞやかして、

「それは筆でせう！」と答へました。

「その心は？」ニコ／＼しながら紀伊さんがいふと、

「もとは白いのが使へば使ふほど黒くなつていくぢやありませんか。」

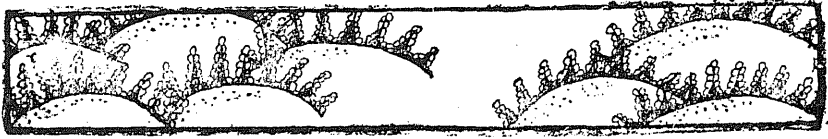
「え、さう。」

と紀伊子さんが快活にうなづきました。先生はだまつてニコ／＼笑つていらつしやいました。

今度は瑠璃子さんが題を出しました。

「下からあがるものなアーに？」

春田先生も紀伊子さんも、「これは！」といった風にちよつと目を丸くしました。さうして



額に小皺をよせて考へぶかさうに頸をふつたりしてゐました。沈黙が數分つゞきました。

「如何です？　おわかりになつて！」といったやうに微笑が絶えず瑠璃子さんの目もとから口もとから、先生と紀伊子さんのお顔へ放送されました。

これには先生も紀伊子さんも匙を投げて、たうとう

「わかりませんわ」といふ詠歎をこめた小さなうめきが二人の口から同時に洩れました。

「はで、申しませう。それはね、水の際に映つた藤の花……」

と言ひ終らないのに、先生と紀伊子さんの口から、

「まあー」

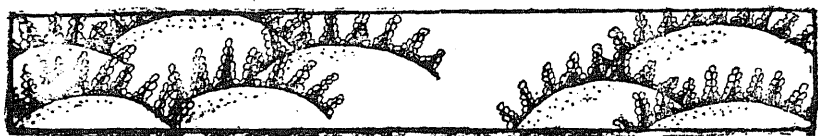
といふ呆れたやうな、物珍しいといつたやうな妙な感歎詞が飛び出しました。

瑠璃子さんの難問にすつかり弱らされた紀伊子さんは、先生におねだりするやうな口つきで、

「ねえ、先生。今度は瑠璃子さんの解かれないやうな問題を出して頂戴な。」といひました。

「え、さうね」

と軽くお答へになつた先生は、いつものやうに優しいほゝろみをたゝへながら、「少し待つていらつしやい。」と仰しやつて隣のお部屋へお入りになりました。



三

やがて先生は相變らずニコ／＼して出ていらつしやいました。さうして二人の前にお坐りになると、だまつて右の掌を二人の前にお出しになりました。二人がびつくりしてそこを見つめますと、そこには墨くろ／＼と平假名の「と」といふ字がかいてありました。

「お二人で、この掌にかいてある物を買つて来て下さいな。」  
と片ゑくぼでおつしやいました。

「あら！」

「あら！」

といふ驚きの聲が二人からをどり出しました。先生は二人の顔を見て聲を立て、お笑ひになつて、「さあ、お二人に、各二十錢づゝ差上げますから、どうぞこれをといつて又掌のひらをお示しになつて——買つて来て頂戴。」と仰しやいました。

數分の間三人は店屋のある町中を歩いてゐました。

四

ものゝ十五分も経つたかと思ふ頃まづ紀伊子さんが

「先生！ 只今。」



といつて入つて來ました。何を買つて來たのか懷をうんとふくらませてゐます。それから少し經つと瑠璃子さんが歸つて來ました。

「先生！只今」

といつてお挨拶がすんだ後で、身を起したところを見ると、これも大きな風呂敷包みをもつてゐます。

## 五

「どうも御苦勞様」

と優しくねぎらつて下さつた春田先生は相變らずニコ／＼なさりながら

「まづ紀伊子さんに伺ひませう。あなたは何を求めになつて？」

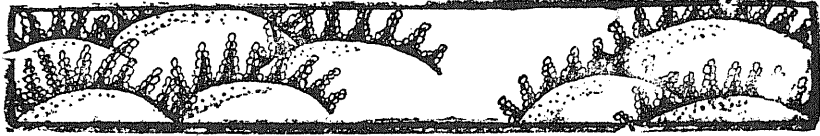
紀伊子さんは、

「先生！これ」

といつて懷から大きな物をつかみ出して前におきました。見ると大きなへちまでありました。

「おや／＼！」あちまあ！」

といつて先生と瑠璃子さんは笑ひこけました。やつと笑ひをおさへた先生は、まだをかさしさに咽るやうなお聲で、



「では瑠璃子さんのお買物は？」

とおつしやいました。瑠璃子さんは、おもむろに大きな包を開いて、大東な塵紙を一束どさりと前に出しました。

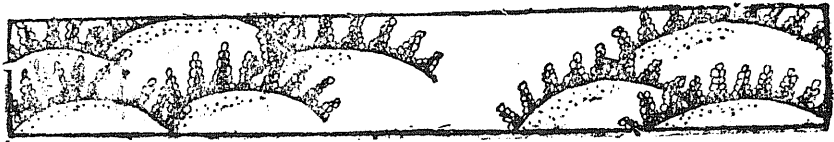
先生と紀伊子さんは、もうゐても立つてもをられないやうに笑つてくづれてしまひました。さうして再び平靜にたち歸つて、「一體そんな物をお求めになつたわけはどういふのですか？」

と質問のお言葉が先生のお口から出るまでには、「ホ、、、」「ヒヒ、、、」「フ、、、」といふ笑の劇が随分長く續いたのでした。

## 六

紀伊子さんがへちまを買つて來たのはかういふ譯でした。「と」といふ字から「いろは歌」を思ひ出して、「いろはにはへとちりぬるを……」とよんだり、「すせもひるしみ……」を逆に讀んだりしてゐるうちに、ふと思ひついたのは、「と」といふ字は「へ」と「ち」の間にあるといふことでした。それで、「へち間」を買つて來たのです。

瑠璃さんが塵紙を求めて來たわけにも面白いのはれがあるのです。瑠璃子さんもやつぱりこの間春田先生からお習ひしたばかりの「いろは歌」を思ひ出したのです。さうして途



々口ずさんであるうちに、はたと思ひついたことは、「と」といふ字は「…とちりぬるを」といふやうに、「ちり」といふ字の上にあることでした。それで、これは名案と「ちりかみを」買つて來たのでした。

七

二人からこの買物のわけをお聞きになつた先生は、「お二人ともお見事〜。お二人はの智恵は紫式部と清少納言のやうに、何れ負け劣りはありません。勝負なしです。おえらい〜。」「さあこれから三人で欣びのダンスをしませう。」と仰しやつてお立ちになりました。先生は「と」とかいた右掌を小旗のやうにおかざしになり、紀伊子さんはへちまを振りかざし、瑠璃子さんは塵紙を高く捧げて、南洋の野蠻人の歌かなんどのやうな奇妙な節をつけて「いろはにはへとちりぬるを…。」と歌ひながら、足拍子面白く踊りつゞけました。

(一四、一二、七、)

人の親の心はやみにあらねども

子を思ふ道に迷ひぬるかな